

甲斐駒ヶ岳一早川尾根一鳳凰 若き日の苦い思い出 S29 (1954) 10・14~17

食料は乏しく、装備は無し、アルバイトで山靴を買い、手造りのキュスリングを背負い
自分達でボイラー室を回修して部室を作り・・・戦後の困窮を色濃く残す小金井時代の山岳部
それでも心は豊かな時代だったと自負しています。

M14 本坊雄一、大島明夫、野沢 豊 3人の 登山記録と言うよりは苦い思い出です。

黒戸尾根からの甲斐駒ヶ岳は標高差2250m、何しろ苦しかった急登坂のみ強烈に記憶

当時は南アの山小屋は全て無人or 素泊まり、重いキュスリングを背負っての山行でした。

第一日 急登坂の連続 数多くの鎖、梯子をよじ登り7合目無人小屋泊

今は立派な梯子が付いているが当時は危険な岩登りの苦闘だった。



黒戸尾根の登り



6合目からの甲斐駒ヶ岳

第2日 早朝に7合目小屋を出発→頂上に到達 2965m

真っ白な砂の頂上、石室があった。広い頂上は迷い易く、遭難碑が多く見られた。



駒ヶ岳 山頂

仙水峠→北沢長兵衛小屋泊。今は北沢峠までバスが入っている。

長兵衛さんが太い指で出してくれた糠漬物（蕪、大根？）美味しかった（自炊200円）

第3日 早朝出発。長い早川尾根縦走が始まる。初雪の北岳を目の前にして気分ルンルン



早川尾根 あさよ峰から 初雪の 北岳・間の岳・仙丈岳

ところが北岳に急に雲がかかり、あっという間に見えなくなってきた。

午後になったら雪が舞い出した。気は焦る・・・そのうち

大島の足の動きが鈍くなってきた、昨日来の疲れか？お互いに励まし合いながら

歩くうちに暗くなってきた。鳳凰の賽の河原に到着したころは雪をかぶった道標の

ケルンが菩薩像・仏様に見え ぞっとした。

やがて、ケルンも見えなくなり遂に道を失ってしまった。

暗闇の雪原で3人相談の結果 本坊リーダーに従ってドンドコ沢を下りることにした。

道に迷った場合 沢に入るのは邪道であるが

地図によると鳳凰小屋はドンドコ沢沿いに在った筈だ。

沢に入ったら 滝に落ちたり、岩で滑ったり・・・ずぶ濡れ 悪戦苦闘

真っ暗闇の夜8時、突然小屋の明かりが見えた。 着いた・助かった！！！！

御座石から登り先着のC9伊藤オッサンが火を焚いて温かく迎えてくれた、神様 仏様・

・・・あとは覚えていない。・・・今考えてもゾットする遭難寸前の山の苦い思い出である。



第4日 鳳凰小屋 回りの 朝の雪景色

2014・6・25 野沢豊 記

C9 伊藤淑郎 追記

全く思いもかけず貴兄らの『若き日の思い出』を拝見し、僕もその中に出て来たのにびっくりしました。この記事が無ければ僕はこの山行を思い出すことは無かったかも知れません。

僕の山は風変わりな山で、OBになってから山岳部に入り学校を去るまでの3年間余りの線香花火の様な山行でした。

僕は単独行を好みませんでした。たった一度一人で歩いた山がありました。それが皆さんと鳳凰小屋で落ち合った山登りでした。この思い出話で臍によみがえりました。御座石鉱泉からの急登の連続、草臥れ果ててザックも降ろさずに岩に寄りかかって一休み～何時の間にやら眠ってしまいました。はっと気が付いて30分も寝たかと思って時計を見たら 何と2～3分だったのです。雪は降り始めるし、あたりは暗くなるしこれは遭難するかと思いました。それからは可なり残っている行程を休むことも無く歩き通しようやく鳳凰小屋に辿り着き皆さんと出会いました。単独行の危険を肌で感じた貴重な体験でした。僕の記憶力の低下加減と、思い出の素晴らしさ、有り難さを痛感するお話でした。皆さんの白黒写真 がなかなか良いし、皆さんも若かったですね。